

歎異抄第四章にいわれる「存知のごとく」の 意義に対する一私見

藤 岡 隆 男

歎異抄第四章に、「慈悲に聖道浄土のかわりめあり 聖道の慈悲といふはものを憫み 悲しみ育むなり しかれども思ふが如く助け遂ぐる事極めてありがたし また浄土の慈悲といふは念仏していそぎ仏に成りて大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいふべきなり 今生にいかん愛し不便と思ふとも存知のごとく助け難ければこの慈悲始終なし しかれば念仏まをすのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候ふべきと、云々」¹⁾ とあるが、その中に出てくる「存知のごとく」の語について香月院深励は「存知ノゴトクトハオモフガゴトクト云フコトナリ」と説明している²⁾。

その影響を受けてかどうかは解らないが、暁鳥は「思ふ存分に³⁾」とか「思ふやうに⁴⁾」と解しているし、梅原真隆は「思ひの儘に⁵⁾」、多屋頼俊は「思ふ通りに⁶⁾」、増谷文雄は「思うようには⁷⁾」、また本多顕彰は「思うままに⁸⁾」と説明している。さらに東本願寺教学局教学部の歎異抄の註にも「思うように⁹⁾」とあるし、岩倉政治は「とことんまで¹⁰⁾」という語を用いて、前に云う「しかれども思ふが如く助け遂ぐる事極めてありがたし」の「思ふが如く」のの意味を再び繰返しているか、或はその意味を強調しようとしているのである。

ところが「存知」という語を広辞林でみると「志ること」となっている¹¹⁾し、大字典にも「しる。承知す。」となっている¹²⁾。また承知とは「旨をうけたまはること、承引、承諾¹³⁾」とあり、或は「①旨をうけたまはること、②うべなふこと、うけがふこと、うけひくこと、(承引、納得) ③知りていること、存じてゐること」とあり¹⁴⁾、広辞苑にも「知っていること。承知。¹⁵⁾」とあって、「思う」という意味は存しないのである。

であるから、文字の上から云っても「オモフガゴトク」という説明にはならないように思われる。道綽禅師は釈尊一代の仏教を聖道門と浄土門に分けられ、今の時代は聖道門の修行は難しく、「唯浄土ノ一門アリテ通入ス可キ路ナリ」と、その著『安楽集』にあらわしている。而してその論拠として『大集月蔵経』の文「我未法時中億億衆生起行修道未有一人得者。如今未法現見五濁惡世唯有一淨土一門可通入路」を引用しているのであるが¹⁶⁾、この文は法然の撰撰本願念仏集¹⁷⁾にも、和語燈録¹⁸⁾その他にも随所にみられることであり、また教行信証化身上卷¹⁹⁾にも引用されており、正信偈にも「唯明浄土可通入」とうたっていることは周知の事実である。

また『安楽集』の「第四 破下願生三藏土不願生淨土一者」の文に、「問曰。或有、人言、願生三藏國教化衆生不願往生淨土、是事云何。答曰。此人亦有一徒。何者若身居不退已去為化雜惡衆生故能処染不染逢惡不變。如鵝鴨入水水不能濕。如此人等堪能処穢拔之苦。若是実凡夫者唯恐自行未立逢苦即變欲濟彼者相与俱没。如似遇鷄入水。豈能不濕。是故『智度論』(卷二九意)云。『若凡夫発心即願在三藏土拔濟衆生者聖意不許。』何意然者。龍樹菩薩釈(智度論卷二九意)云。『譬如四十里冰如有二人以二

升、熱湯、投之、當時、似、如、少、減、若、經、夜、至、明、乃、高、於、余、者、凡、夫、在、此、發、心、救、苦、亦、復、如、是、以、貪、瞋、境界、違、順、多、故、自、起、煩、惱、返、墮、惡、道、故、也。」とあって、この「一升ノ熱湯」の譬は『往生要集』にも引用されており、今生にいかにおし不憫と思っても、聖道門的慈悲が完全になし得ないことは、当時の浄土門の人々は聞いて知ってはいた筈であり、また何時も聞かされていた筈であります。

だから「存知の如く」の語に、皆さん方も聞いて既にご存知の通り、聞いて知っていられる通り、という意味も含まれていると考える考え方もあってよいのではないだろうか。

而して、聖道門的慈悲、今生に如何におし不憫と思っても助けられないのだからと云って、親鸞が人間的愛情を捨て切ったのでは全くない。親鸞の愛情は魚や草木にまで及んでいるのである。

即ち、口伝鈔には、『一、一切経御校合の事。西明寺の禅門の父、修理亮時氏、政徳を専にせしころ一切経を書写せられき。これを校合のために智者、学生たらん僧を屈請あるべしとて、(中略)両大名に仰せつけて尋ねあなぐられけるとき、事の縁ありて聖人をたづね出したてまつりき(中略)聖人その請に応じましまして一切経御校合ありき、(中略)あるとき盃酌の御にして種々の珍物を具へて諸大名面々数献の沙汰に及ぶ、聖人(中略)ただ世俗の入道、俗人等に同じき御振舞なり、袈裟を御着用ありながらまあるとき、西明寺の禅門、ときに開寿院とて九歳、さしよりて聖人の御耳に密談せられて曰く「あの入道ども面々魚食の時は袈裟を脱ぎてこれを食す 善信の御房いかなれば袈裟を御着用ありながら食し在すぞや これ不審」と云々 聖人仰せられて曰く「(中略)善信は此の如きの食物邂逅なればおほけて急ぎ食べんとするにつきて忘却して此を脱がず」と云々(中略)また或時さきの如くに袈裟を御着用ありながら御魚食あり 又開寿殿前の如くに尋ね申さる 聖人また御忘卻と答へまします そのとき開寿殿「さのみ御廢忘あるべからず(中略)まげてたゞ実義を述成あるべし」と再三こざかしく望み申されけり その時聖人のがれがたくして 幼童に対して示しましまして曰く「(中略)とても食する程ならばかの生類をして解脱せしむるやうにこそありたく候へ 然るにわれ名字を釈氏にかるといへども 心俗鹿に染みて智もなく徳もなし 何によりてかかの有情を救ふべきや これによりて袈裟はこれ三世の諸仏解脱幢相の靈服なり これを着用しながらかれを食せば袈裟の徳用をもて済生利物の願念をや果すと存じてこれを著しながらかれを食するものなり(後略)」とあり、また弟子の信楽房が親鸞と意見が合わず、門弟をはなれて去って行った時、蓮位房が、かつて渡した本尊や聖教をとり返すよう進言したが、親鸞は「本尊聖教を取返すこと甚だ然るべからざることなり(中略)然るに親鸞が名字ののりたるを法師憎ければ袈裟さへの風情に厭ひ思ふによりて、たとひ彼の聖教を山野に棄つといふとも、その処の有情群類かの聖教に救はれて悉くその益を得べし 然らば衆生利益の本懐そのとき満足すべし(後略)」とあるをみてもわかる。

然るに安樂集には度論を引用して、「譬、如、二、人、俱、見、父、母、眷、屬、没、在、深、淵、一、人、直、往、尽、力、救、之、力、所、不、及、相、与、俱、没、一、人、造、走、趣、一、舟、船、乘、来、濟、接、竝、得、出、難、苦、薩、亦、爾、若、未、發、心、時、生、死、流、轉、与、衆、生、無、別、但、已、發、善、提、心、時、先、願、往、生、淨、土、取、大、悲、船、乘、無、礙、舟、才、入、生、死、海、濟、運、衆、生。」とあることを知りながら、親鸞は教行信証信巻で「誠知悲哉愚禿鸞沈没於愛欲広海迷惑於名利太山不四喜入定聚之数不四快近真証之証可恥可傷矣」と、悲歎している。

遠山諦観は、この「愛欲ノ広海ニ沈没シ」という箇所を「妻子眷屬等に対する愛着云々」と註釈している²⁶⁾が、親鸞は、真に妻子眷屬有縁の者を救わんとするならば、先づ自身が定聚の数に入り、

真証の証に近づくことであることを知りつつも、妻子に対して世俗的な愛情にひかされ、或はその現実の世俗的な苦悩を見るに忍びず、やはり人間なみの幸せを与えてやり度いとばかりあせって、共々にはかり知れぬ人の世の欲望にまどい、知らず識らず止まることを知らぬ深みにと沈没してゆく自身を見出して愕然としたことであろう。

ところが人間なるが故の苦悩は、親鸞のこの世の生あるかぎり解消しなかったのである。藤原凌雪は、晩年親鸞は長男善鸞が異義を唱えて関東の門弟を惑わしたため彼を義絶したが、それによって親鸞は人間愛の反省をさらにさらに深められたことであろう。親鸞は人を愛さなかったのではない。また未来の幻影を追うて、現世の努力を放棄したのでもない。それどころか、人一倍の愛情を持っていたればこそ「存知のごとく助け難き」現実的制約を反省し悲歎せられたものであります²⁷⁾、といている。

また赤松俊秀は、一般に『正像末和讃』は善鸞の異義によって末法の実相を痛感した親鸞が、それを悲歎するために著わしたものと解釈されている。おおよその論としてはこの見方は正しいが、善鸞の義絶後九カ月後の正嘉元年閏三月一日に一応できあがった草稿本と比べて、それから十八カ月後の正嘉二年九月二十四日に発表された初稿本の方が、仏智疑惑罪過悲歎述懐も加えられ、はるかに深刻に末法を悲歎していることを見落してはならない。本来ならば、善鸞の義絶で打撃を受けた親鸞も、月日が経過するにつれて、その打撃から立ち直るのが普通である。それが逆にますます末法の悲歎が深くなったのはなにゆえであるかを考える必要がある²⁸⁾、と云っている。

私に考えると、これは善鸞義絶後も人の子の親らしく、善鸞の反省を待ち侘びていたからではないであろうか。

山辺習学は、勘当を言い渡す親は、言葉は厳しいが、心は子の反省を求めて泣いている。言葉で突離す以上に心は之を抱きかかへる。愛の秘義である。更にもう一つ注意すべきは、親鸞の手紙の中で、一言も荒い言葉を見出し得ないのは驚くの外はない。どんなに弟子を責める時でも、子を叱る時でも、少しも怒りや罵りの言葉がない。先方の誤ちを摘別してもその次には必ず「心憂いことだ」「悲しいことだ」「気の毒の至りだ」といって、哀愍の限りを示してある²⁹⁾、といているが、この事件で、自己の中に人間らしい愛情さえもないとまで悲歎したがゆえではないだろうか。されば初稿本には「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ……」と叫ばずにいれなかったのであろう。

親鸞も弘長二年九十歳となり、冬の寒さもきびしくなった頃から病の床についた。

死期が近づいたと悟った親鸞にとって、一番心にかかるのは、覚恵といま一人の女子をかかえて寡婦となった末娘の覚信尼のことであった。恵信尼の財力も知っている。やむなく親鸞が考えたことは覚信尼の生国であるところから門弟のうちでも覚信尼にはなにかと好意を示している常陸国の門弟らに依頼することであった。親鸞は十一月十二日に門弟に自筆で消息を書いている³⁰⁾。

私に考えるならば、勘当した我が子をいとおしみ、遺してゆく薄幸の我が子の行く末を案ずるのは、世俗の親の偽わらざる心情であろう。

今生にいかに愛し不便と思ふとも存知のごとく助け難ければ」と云った親鸞は、その苦悩の人生体験をとおして、「あなたもよくご存知のとおり、よく知っていられるとおおり」と、子を持つ世俗の親なら誰でも体験し、凡そ真剣に人を助けんとしたことのある人なら誰でもただちに納得できる筈のものであることを信じて疑わなかったのではあるまいか。

而してそれが同時に全く一般大衆の偽らざる心情であったのであるから、その心情の基盤に立ち、末とおって一切の者を救うには、念仏していそぎ仏になれば、その大慈悲心をもって、思うように衆生を利益することができるのであるから、念仏申すことが末とおった大慈悲心であろう、と聞け

ば、早天に慈雨を得たように、この念仏の教えが大衆に浸透していったのも無理はないと思われる。

当時浄土門の教は、それまでの伝統的聖道門に対して、たしかに新興宗教であった筈である。やたらに教義や教権をふりまわしても大衆の支持が得られるものではない。

「存知のごとく」を「思うように」と積する限り、聖道門と浄土門の慈悲の比較に終わってしまったら、単なる教義、或は思想に終わってしまうおそれがないとは云えないであろう。果して大衆の支持が得られたであろうか。

岩見至は宗教家必ずしも思想家ではないし、思想家必ずしも体験の人ではないようであるが、親鸞はこの点において驚嘆すべき存在である。三つの相をすべて兼ね備え、渾然一体をなしていることは、日本の思想家にあっても類例が少ないのではないかと思われる。余り幸福であったとはいええない親鸞の家族生活において、一番の苦しみは矢張り善鸞の義絶でなかったろうか。親鸞も凡夫、善鸞もどより凡夫、凡夫のはからいに義絶を以てすることも同じく凡夫のはからいにすぎぬではないか。しかも老親鸞にとってこの際義絶のほかには如何なる手段があったか。既に肉の痛みにおいて凡夫を自覚し、今またそのはからいにおいて凡夫を自覚する。ここに世間虚仮唯仏是真ということ、いよいよ実感せしめられたに相違ない。親鸞の薰陶あって尚且間違ったということ、多くの信者が動揺したというごと、あれこれ考えると、歴史的状況を割引しても、念仏の教というものが、実際問題としそんなに易しいものでないことを示しているようである。善意に解釈すれば、善鸞は教団の発展をはかるに急で、その土地土地の有力者と結びつくことを考えたのであろう。それに対して、永年親鸞が力を注いで布教した対象はいわゆる屠沽の下類と呼ばれる如き下層の人間であったらう³¹⁾といっている。

さればこそ「この存知のごとく」を「思うように」と積する限り何時の間にか大衆から遊離してしまうおそれなしとしない。

或は言うであろう。「今生にいかに愛し不便と思ふとも存知のごとく助け難ければこの慈悲始終なし、しかれば念仏をすのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候ふべき」と。

而してこの念仏をすのみぞとは、度し難い大衆のわづらわしきから逃れて、念仏して自分一人さえ往生すればすべてを救い得るものとするなら、教義も布教も必要なく、念仏をすすめることの意義も失われてしまうであろう。「存知のごとく助け難い」から念仏をすすめるのである。『教行信証』にも『大悲経』の言葉を引用して、「大悲經云。凡名衆生。皆由念仏。衆生不斷。善惡其命終。定生安樂。若能展轉相勸。行念仏者。此等衆生。行大悲人³²⁾」とある。

どこまでも大衆の中に入って念仏をすすめようと努力精進した親鸞であるならば、大衆の苦悩の中に自己の苦悩を見出し、自己の人間の苦悩をとおして大衆の苦悩を汲みとった筈である。

雲井昭善は「一つの宗教、それも伝統的宗教という基盤からうち出された新興宗教が育つためには、何時の時代においても、大衆の支持がなくてはならない。その点ゴータマ・ブッタの強調した仏教の真精神は、よく当時の大衆の心を把握し、人生に光明をかけた。ゴータマの宗教は人間の宗教である。バラモン宗教の如き、上から圧えつける力の宗教又は人間の心の窓を閉ざした宗教を打破して、万人の心の窓を開こうとした。そしてこのことは時と処をかえて親鸞の場合にも云えるのではないだろうか。親鸞のめざしたものは誰にでも可能な人間の本性に目ざめた絶対他力の宗教として鎌倉仏教を代弁するものであった。それは過去の日本仏教史にみられない独自の宗教体験からうち出されたものであり、奈良仏教、平安仏教を通じてあまりにも庶民的な仏教であった。一つの新しい宗教がうち出されるということは、本質的には何らかの権力によるものではなくして、大

衆の手によって支持された、言わば広汎な庶民という底辺からうち出されたものでなくてはならない。その点ゴータマにしても、親鸞にしても、その説くところが、大衆の心を把握しようとした。否大衆と共にある宗教をうち出そうとしたことは、卒直に認められてよいであろう」と云っている³³⁾が、全く同感である。

藤原凌雪は、歎異抄第九章の「念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜の心おろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたき心のそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらんと、もうしいれてそうらいしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房同じ心にてありけり。……」という箇所を、「唯円坊自身が親鸞聖人に向って、法悦も湧かず浄土を慕う心も起らぬ淋しき心境を訴える場面がありますが、これに対して聖人は、親鸞もこの不審ありつるに、唯円坊おなじ心にてありけり、と同調し、自分の心の底をさらけ出してなぐさめていられるのであります³⁴⁾」と説明されてありますが、この面にも、親鸞の人生体験をとおした偽らざる人間らしい悲歎がそのまま大衆の涙であり、大衆の悲歎が同時に親鸞の涙であったことが、よくうかがい知ることが出来ると思われまます。

以上のような理由によって、「存知のごとく」を、あなたもよくご存知のように、あなたもよく知っていられるとおおり」という意に私はとりたいのであります。

勿論真宗教学については全くの素人でありますので、専門の方々には色々ご高説もあることと存じます。よろしくご叱声ご鞭撻をたまわらば幸甚に存じます。

主 要 参 考 書

- 1) 島地大等 聖典 浄土真宗 546頁 昭25。明治書院。
- 2) 香月院深励 歎異抄講林記卷下「真宗大系」24卷 60頁 昭 4。真宗典籍刊行会。
- 3) 暁烏敏全集 第一部 第六卷 86頁 昭31。香草舎。
- 4) 同上 7卷 14頁 昭32。香草舎。
- 5) 大藏経講座 17卷 262頁 昭 8。東方書院。
- 6) 多屋頼俊 歎異抄新註 7頁 昭29。法蔵館。
- 7) 増谷文雄 歎異抄 28頁 昭39。筑摩叢書。
- 8) 本多顕彰 歎異抄入門 84頁 昭39。光文社。
- 9) 歎異抄 10頁 昭34。東本願寺。
- 10) 岩倉政治 親鸞 88頁 昭32。法蔵館。
- 11) 広辞林 1196頁 昭10。三省堂。
- 12) 大字典 574頁 昭 8。啓成社。
- 13) 大字典 923頁 昭 8。啓成社。
- 14) 広辞林 996頁 昭10。三省堂。
- 15) 広辞苑 1279頁 昭40。岩波書店。
- 16) 真宗聖教全書 1巻 410頁 昭24。興教書院。
- 17) 同 上 1巻 929頁 同 上
- 18) 同 上 4巻 547頁 同 上
- 19) 同 上 2巻 153頁 同 上
- 20) 同 上 1巻 395頁 同 上
- 21) 同 上 1巻 773頁 同 上
- 22) 島地大等 聖典 浄土真宗 572頁 昭25。明治書院。
- 23) 同上 570頁。
- 24) 真宗聖教全書 1巻 431頁 昭24。興教書院。
- 25) 親鸞聖人全集 教行信証 1、153頁 昭33。親鸞聖人全集刊行会。

- 26) 遠山諦観 教行信証精解 330頁 昭13年。新潮社。
- 27) 藤原凌雪 親鸞の歩んだ道 140頁 昭27。百華苑。
- 28) 赤松俊秀 親鸞 310頁 昭38。吉川弘文館。
- 29) 山辺習学 親鸞 168頁 昭25。大谷出版社。
- 30) 赤松俊秀 親鸞 329頁 昭38。吉川弘文館。
- 31) 岩見至「否定ということ」親鸞聖人 262頁 昭36。大谷大学編。
- 32) 真宗聖教全書 2巻 77頁 昭24。興教書院。
- 33) 雪井昭善「ゴータマ・ブツダと親鸞」親鸞聖人 139頁 昭36。大谷大学編。
- 34) 藤原凌雪 親鸞の歩んだ道 161頁 昭27。百華苑。